

安政地震記録および伝承にみる「民俗知」

——災害伝承の民俗学的研究——

林 英 一

一、はじめに

日本は何度も地震の被害を受けてきた地震国であり、地震についての多くの記録が残されている。しかし過去の記録を使った地震研究は、科学的分野が中心である。管見の限り人文学的な観点による地震記録の研究は少ない。ちなみに『日本民俗学』に掲載された「地震」絡みの論考は、石垣悟による活動報告としての「民俗資料の救済——新潟中越地震における対応から——」〔石垣 二〇〇六〕だけであり、二〇一一年の京都民俗学会第三〇回年次大会においても、蘇理剛志が「災害と有形民具資料——台風一二号災害による和歌山県下を中心とする現状と課題」、加藤幸治が「被災文化財から学ぶこと」と題しての発表を行ったが、有形民俗資料の救済及び、有形民俗資料と地域社会との関わりの中での物質文化研究を志向する発表であり、少なくとも民俗学では、地震における民衆行動・民衆意識についての研究は対象外とされてきたように思える。

数少ない人文系からのアプローチとして北原糸子の『安政大地震と民衆』『北原一九八三』があげられる。刊行は一九八三年であるが、「関東大震災以前に首都を襲った大地震は安政二年（一八五五）の大地震であった。この地震に対する古記録は膨大な量にのぼるが、地震学の分野での利用に留まり、歴史の分野で、この地震に人々がど

う対応したかを考えたものではない」と述べており「北原 一九八三 一」、刊行から約三十年経た現在もその傾向は変わらないように思える。ただし、北原のアプローチは「あとがき」で「本書の内容は、災害史と社会史の両分野に亘っている。」とする「北原 一九八三 二六二」。民衆（大衆）を災害との関連で捉えることを意識しているが、北原の視点の中心は、地震後の民衆動向や救済のあり方にある。安政地震のときには鯨絵が多く書かれた。北原は鯨絵にも言及しているが、鯨絵は安政の地震の直後に発行されたものであり、震災後の民衆の観念を知る上では貴重な資料となることは確かである。鯨絵研究はコルネリウス・アウエハントも行い、『鯨絵―民俗的想像力の世界』「アウエハント 一九七九」を著しているが、鯨絵の形成論的問題と、そこに見られる民衆意識を論究したものである。従来の人文系からの地震研究は、地震後の民衆行動や民衆が地震をどのように捉えたのかという問題意識が中心となっているといえる。

また畑中章宏は『柳田国男と今和次郎 災害と向き合う民俗学』を著している。これは柳田や今が地震・津波などの災害とどのように向き合ってきたのかを論じたものである。著者の視点はあくまでも両者の思想的分野であり、民衆自身の意識・認識を論じたものではなく、サブタイトルに「民俗学」の語句を用いているが、柳田や今がどのように災害を捉えたかという両者の学的視点に基づくものと読み取った「畑中 二〇一一」。

本論の主題は、地震・津波に関する「民俗知」である。「民俗知」としたのは、それが有事において、既知の事実として認識され、それが民衆の行動に影響を与えたという点において、民俗の持つ知識に価値があると考えられるためである。実際に、二〇一一年三月の地震においても、言い伝えを守ることで、被害を免れたとのニュースがあった。民俗学からの地震へのアプローチとして、「民俗知」の形成と機能を検討することは無駄ではないと考える。その点において北原やアウエハント、畑中の視点とは異なるものとなる。そして「民俗知」形成を主題におくことから、多くの記録がある安政時代の地震記録を中心とする。

二、「民俗知」とは何か―問題の所在―

小池淳一は「民俗知とは何か」という、「民俗知」そのものを問う論考を発表している「小池 二〇〇八」。しかし、サブタイトルに「宗教者概念の再検討」とあり、「はじめに」で、「前近代の、とりわけ庶民生活において宗教はどのような意味を持っていたのだろうか。〈中略〉これまで近世宗教史や民俗学が宗教者と名づけてきた存在に對し再検討を行い、「民俗の知」に對する考察の端緒としたい」と述べているように「小池 二〇〇八 三四―三五」、「民俗知とは何か」としながら、その論点は宗教者との関わりに限定し、宗教者によってどのように「民俗知」が形成されたかを論究したものとなっている。宗教者の知識や活動による「民俗知」の形成は「実践と受容」にあるとし「小池 二〇〇八 五七」、実践についての論究はなされているが、受容に関しての具体的なメカニズムについては論究されていない。

また小池は、『日本民俗学』の「特集 日本民俗学の研究動向（二〇〇三―二〇〇五）」の中で、「民俗信仰は日常生活のなかで、人々の行動や意識、観念によって織り上げられていく側面を持つ。このことはその柔軟性や可変性につながり、把握していく際の視点を意識しないと無秩序で非体系的な行為や現象の集積であるかのように判断される場合があるだろう」と述べる「小池 二〇〇六 一〇八」。ここでは小池は「民俗信仰」という言葉を用いているが、それは「日常生活の中で、人々の行動や意識、観念によって織り上げられる側面を持つ」ものとする。「民俗信仰」に對する説明ゆえ、宗教的側面を持つことが前提であり、先に紹介した小池のいう「民俗知」と重なるものと考えられるが、その成立は人々自身が創出するとする。これは「民俗知とは何か」において「実践と受容」と述べた論旨につながるものと捉えられよう。つまり「民俗知」は、異なる文化（宗教者）との接触の中で、自ら作り出してきたものということになる。さらに小池は「無秩序で非体系的な行為や現象の集積と判断される」

とも指摘する。「民俗知」は民俗社会の中で適応化し、沈着していったものであるが、それはいたって断片的に積み重ねられたものであり、互いに構造的関連を持たないと見られるということである。

実際に「俗信」と呼ばれる伝承は、民俗誌では体系化されずに羅列的に記述されるのが普通である。しかし、常光徹は『親指と霊柩車』〔常光 二〇〇〇〕の中で、「まじない」を取り上げ、そこに見られる心意を体系的に追究した。「無秩序で非体系的」であるのは、小池が指摘するように、「判断」されているだけであるが、それらが構造的に結びつきを持つことを常光は明らかにしている。常光の成果は視点の置き方で体系化が可能であることを示したことにある。

常光の分析的手法に対し、渡邊欣雄は『民俗知識論の課題』〔渡邊 一九九〇〕で、沖縄県をフィールドとして「民俗的知識」による民俗世界を描いた。渡邊は「民俗的知識とは話者の知識」であるとし〔渡邊 一九九〇 一七〕、「話者側の知識的世界のありようを例証する」と述べる〔渡邊 一九九〇 五三〕。話者が社会をどのような見ているのか、つまり民俗が民俗自身をどのように捉えているのか、それを「民俗知識」として論究したものであり、分析的に事象を普遍化するものではなく、あくまでも話者の話者による世界観を論究したものである。そのために、渡邊は知識を知識として抽出するのではなく、社会の中の民俗自身による意味付けに視点を置いた。渡邊はさらに、「民俗的知識は、あらゆる特定の知識になりうることで、知識一般と区別ないし、区別するべきものではない」と述べる〔渡邊 一九九〇 一六〕。筆者は「民俗知」を民俗が取得した知識が、民俗社会の中で意味が付与され、民俗に沈着し定着したものと定義したい。その意味において、筆者の「民俗知」は渡邊の「民俗知識」と重なりを持つものと考ええる。

ただし、渡邊の関心は社会内部での人々の観念であり、その観念の中でどのように生活しているかというところにある。渡邊は話者の世界を論究したため、必然的にある程度閉じた社会を論じる形になるのは必然である。しか

し、筆者がもとめる「民俗知」は共同体の内部だけに成立するものではない。特に本論が対象とする地震は、共同体の中で完結する事象ではないこともあり、その中でどのように「民俗知」が成立し、またどのような「民俗知」に意味が見出されてきたか論考することになる。

三、安政地震記録

安政時代の地震は、宇佐美龍夫による『大地震』の末にある年表から、特筆すべきものを時代順に並べると、東海地震（二月四日）、南海地震（二月五日）、伊予地方の地震（以上嘉永七年）、飛驒地震、江戸地震（以上安政二年）、北海道日高地方の地震、江戸地震（以上安政三年）、駿河地方の地震、伊予・安芸地方の地震、飛驒地方の地震（以上安政五年）となる「宇佐美 一九七八 二二五～二二六」。嘉永七年から安政への改元は一月二十七日であるが、嘉永七年の地震も、当時の記録において「安政」の年号を用いるものも多く、本論においても安政地震の一環として捉えることにする。

ところで、小川直之は「伝承・フィールド・地域」の中で、「十八世紀中期頃から日記という形で記録することが広まった」と述べ「小川 一九九三 七」、神奈川県内の日記の存在について、「宝永期頃から出現しはじめ、元文・寛保期以降広がり、幕末期、明治期には多くが存在する」と指摘する「小川 一九九二 一五二」。神奈川県の実態について述べたものだが、全国的にみても幕末には民衆による多くの「日記」が残されている。小川はこの時期に日記が多く書かれるようになった理由として、「文化や社会に対する個別認識化が行われるようになった」ということで、日常の生活のなかの民俗伝承に、質的な変化があったのではないかと推測できないだろうか」と指摘する「小川 一九九三 七」。

またこの時代について、北原糸子は「武家の動向に詳しいばかりでなく、民衆の動向についても他の日記には感

じられない眼くぼり」をもつ「プロの情報屋」と呼ぶ人たちが活動していたと指摘する「北原 一九八四 一五七」。安政期には多くの日記だけではなく、情報屋の活動による情報も見られるということである。笠亭仙果の『なるの日並』によれば、安政江戸地震では、地震の二日後に「けふは地震火事方角づけとて所々にうる」〔笠亭 一九七四 三九二〕とあり、地震後すぐに、情報が発信されている。情報はそれを欲する人がいなくては、「情報屋」は成り立たない。須藤由蔵は『藤岡屋日記』で、「江戸大地震」〔須藤 一九九五〕や「諸国地震之記」〔須藤 一九八九〕として安政地震について独立した詳細な情報をまとめている。その「江戸大地震」の中で、「地震後いまだ市中おだやかならざるうち諸方よりさま／＼なる一枚摺錦絵、小本など凡之數三百二十余ニ及べり、絵草紙店又は近くにて商ふ者有、皆何れも人こそりて是を求む」と記述している〔須藤 一九九五 五一七〕。この記述から「情報」に対するニーズの高まりだけではなく、それに応える「情報屋」の活動をうかがい知ることができる。ここで一つ問題が生じる。このような発信された「情報」は「民俗知」と呼べるのか。情報により知識を得るということは、それが生活と結び付くならば、「民俗知」と呼べないでもない。しかし「民俗知」はその時限りの「情報」ではなく、次に同じことがおきたときの行動に結び付く知識と位置付けられるものである。つまり知識として沈着したものが「民俗知」であると考えられるものであり、その意味では「情報」はそのままでは一過的なものにすぎず、「民俗知」とは呼べないということになる。

安政年間の地震記録は多い。関谷博は斎藤月岑^{〔安政乙卯〕}武江地動之記^{〔以後〕}（以後『武江地動之記』）の「解題」の「古記録」の項で「斎藤月岑著『安政乙卯武江地動之記』のほか、翠岡主人著『時風録』、城東山人しるす「破窓の記」、なるの後見艸^{〔安政乙卯〕}、服部保徳著「安政見聞録」、畑銀鷄著「時雨廻袖」、赤松宗旦著「利根川図誌」、笠亭仙果著「なるの日並」、村山摂津正隆著「震雷考説」、「安政二年乙卯珍話」、「江戸大地震末代嘶の種」、「安政見聞誌」などが残されている」という〔関谷 一九七〇 一八四〕。また他にも『藤岡屋日記』（含「諸国地震の記」）「江戸大地

震」などがある。このような地震記録の多さは、小川が指摘するように、地震に伴う社会の質的变化があったことに伴う日記もさることながら、北原のいう「情報屋」の活動の活発化が背景にあるといえるのであろう。しかし「情報屋」による「情報」も商売であることを考えるならば、客のニーズを取り込まなければならぬ。すると「情報」の中に、「民俗知」が含まれている可能性がある。情報の中に「往古より」云々との記述が見られ、全体に広まっていはいないが、一部で知られていた知識の存在を見ることができ。これは既知の知識であり、「民俗知」として捉えられるものと考ええる。

さらに武者金吉は安政地震の各地のあらゆる記録を蒐集し『日本地震史料』としてまとめている〔武者 一九五一〕。武者が蒐集した記録の中には、上であげたものの他、書簡や著者が明確でない著書も含まれており、原典にあたることのできないものも多く含まれている。その意味では二次的資料となるが、資料によつては武者自身が著者の説明を加え、また書簡の場合には誰から誰に宛てたものであるか明記していることから、資料性は高いと考える。そのため、安政の地震時の人々の思いや生の情報を直接的に知ることができる民衆記録としては看過できないものである

四、安政地震記録にみる「民俗知」

(一)「民俗知」の形成

武者が蒐集した史料の中に、『安政年間大地震津浪の事』と題する書があり、「若しも子孫相傳はり候はゞ、末の世にてもかよふなる大変大地震などの時は、此一巻を開き見て心得手廻し候はゞ大きに助にも相成候事なり。」として、いくつかの心得を残している。

心得の事

一、大一ばんに金銭肌に付落とさぬよふに用心可有こと。

二、大地震のゆりたしの節は田畠又は建物なき広地へ出て怪我なき様用心可致事。

一、大地震にて沖の方光り物又は大筒を発するよふな音いたし候は、忽彼大浪打寄来るに違ひなければ、早々山に逃げ延可申事。

譬へば箱に水を入置是をゆすり候へば其水外へこぼれ出るか如し。然れば海は世界の水ためなれば天地動く時は必浪立可上物と心得べし。此所のごときは低地細合入江の詰りへは必ず浪背も一入高く打込むものと相心得可申事。

一、大急事なものなれば銭又は重き品はむしろ又は風呂敷等に包み井戸へ沈め置く事。

一、地震津浪前後大小不同にて毎度ゆすりやまざるものなり。此度も一兩年の間やゆりやまず。然れども次第に少なく相成井戸の水皆汐入候故一向呑めぬことなり。夫故入路原にて往古より國師井戸（さゝなみの井戸）と申す井戸をさらへて諸人を助け申候。

安政五年乙午如月下旬書畢「武者 一九五一 四〇二」

この書の冒頭は「嘉永七年十一月五日の事なりけり」で始まるが、「十一月四日午刻過大地震にて〈中略〉。五日七ツ申の刻天地震動大地も既にゆりこむかと案居候処、忽ち大木土塀壁等くずれ落ち、誠にく恐敷事たとふるものなき大そふどふなり。」とあり「武者 一九五一 四〇二」、十一月四日・五日兩日、東海地震・南海地震の二度の大地震に被災した者が、今後も被災するかもしれない子孫のためにしたためたものであろう。そのために、この資料はその地震時のリアル性を伝えている。興味深いのは、「①大地震の時は田畠又は建物のない広地へ出る事」

「②大地震で沖の方に光物が見えたり、大筒のような音がするときには津波がくる事」「③入江の詰りには高い波が押し寄せる事」「④重い品は筵か風呂敷等に包み井戸へ沈めておく事」である。他所の記述に「昔はしらず眼前其難に懸りなんき至極のことゞも、誠に言語にのべつくしかたき大変」とあり「武者 一九五一 四〇二」、これは二度の被災経験から直接得た教訓かもしれない。しかし一方で、地震の難について記述した箇所に続いて、「右此難義は我等逢ふにも全く往古百五拾年も先に事故具に聞傳へもなく候故」「武者 一九五一 四〇二」とあることから、このような大きな地震が百五十年前にもあったことが知られている。しかしそのときにどうすればよいかまではすでに伝わっていなかったことがわかる。

「心得の事」は伝承のない中での難儀から、子孫に対し心構えを残そうとした教訓と推察される。このことは③によって示唆される。これらが直接的経験によるものであるとするならば、この段階では「民俗知」として捉えることはできない。これらが子孫に伝承され、子孫の認識に委ねられて初めて「民俗知」として成立することになるだろう。子孫の認識することにより、伝承として定着するためである。するとこの書は「民俗知」を創出する可能性を持つことになる。

さらにこのことは「民俗知」が「経験」を基にして成立することを示唆する。経験の繰り返しは、経験則を導く。経験則による知識の固定化は、知識の民俗への沈着を意味し、そこに「民俗知」の成立を見ることができると述べるように「渡邊 二〇〇〇 二二」、知識が知識となるには経験が必要であり、上であげた直接的経験をもとにしたと教訓であったとしても、それはまさに「民俗知」として成立し得るものと捉えることができるのである。

『武江地動之記』の著者斎藤月岑は、『武江年表』『東都歳時記』などを著している。北原のいう「情報屋」の一人である。『武江地動之記』は、安政二年一〇月二日の江戸大地震についての記録を詳細に記しているだけではない。

く、聞き書きによる情報を記述しており、当時の人々の声が反映されたものとなっている。その『武江地動之記』に「楓園話」として、「浅草田原町坊正荒川謙吉か妻美保云、八日の夜浅草寺の鶏又鳥山内の梢に宿り夜中啼く事常にかはり數聲也。常になき事とて皆人用心す。」〔斎藤 一九七〇 二〇〇〕とある。江戸地震は二日に発生している。上の記述は江戸地震直後の話である。ここで興味深いのは、鶏や鳥が常ではない数で鳴き、普段とは異なるということである。「普段と異なる」という状況が、直前の被災経験と重ね合わされたということになるためである。それは経験の積み重ねを意味する。地震時の動物の異常行動については、ヘルム・ト・トリブツチが『動物は地震を予知する』〔トリブツチ 一九八五〕の中で、詳細に世界の事例をあげている。その中で、「関東大震災（大正十二年）の四日前、品川の「相州楼」という貸座敷の勝手口からドブネズミの姿が消えた。経営者がこのことを講談師の神田伯竜に話すと、拍竜は「てっきり地震だぜ、安政の地震のときもそうだったというから」と言いつたそうである。この予言はまさに的中した」という日本の話しを紹介している〔トリブツチ 一九八五 五一〕。前の体験をもとにして、今起きたことを結びつけることにより、予兆とみなし、地震発生を的中させたものである。「民俗知」は、それを中継する人が実体験（追体験）することで強固なものになることを推察される例としてあげられよう。前の『武江地動之記』の「楓園話」と合わせて考えるならば、「前体験↓現体験↓前体験の回想↓現体験との比較↓予知」との構図が導かれ、それが経験則として固定されて、「民俗知」が成立するといえることができる。先の「心得の事」に記されたことは、その後に実体験が重ねられることで「民俗知」として定着するということである。

（二）「民俗知」の客観性

地震の前に井戸水が枯れたり、新たに湧出したりすることが水脈の異常との科学的知識は、安政期には一般的で

はなかった。『武江地動之記』では、「高部久右衛門話」として、

地震の数日以前浅草蔵前福本といへる茶店にて何故か竹を土中へ立しか其所より水湧出る。轎夫の息杖を立たる跡より湧出たるよし。諸人奇として見に來り。是前兆なるへしと。此事九月廿一日ともいふ。地震の前井の水増たる所多しと也。神田平永町北川粃藏の

前にも地震の前路次口の外より水湧出せり。人々不思議の事に思ひしとぞ。〔斎藤 一九七〇 一九八〕

この話しの前半は、服部保徳による『安政見聞録』にも店の名前は異なるが詳しく載せられている。『安政見聞録』も、『武江地動之記』同様、ルポルタージュであるが、挿絵も多く、安政江戸地震の様子が詳細に描かれている。

去年十月二日の大震の前なりしが。浅草御蔵前は福田屋といふ。水茶屋のありけるが。駕に乗りて来る人あり。轎夫庭を徘徊なし。少し凹みたる所あるを。何心なく杖にて突に。忽地清水滾々と。湧出で流れければ。主人これを見て大に駭き。立よりてその傍を穿に。いよく清水湧出れば。人々これを奇なりとして。競ひ見るもの市の如し。主人は桶の底を抜き。是を覆ひて井のごとし。汲とりて茶を煎ずるに。その味ひまた美なりこれを見聞く人毎に。たゞ不測のことなりといひて。地脈の狂ひしに心ハ著ず。然るにそれより四五日を過てかの大震ありしなり。其後諸方の風説をきくに。あるひハ井の水常よりハ。逆きこと半に過ぐといひ。遠きこと倍すといふ。そを以てこれを思ふに。地脈くるひて水道の差ひぬる事疑ひなし。されバ福田屋の庭中に暴に清泉の湧出しも。當に地震の前兆なるべし。〔服部 一九七九 一七三―一七四〕

『武江地動之記』『安政見聞録』のどちらも、湧水現象や井戸水の変化が地震の前兆として捉えられているが、『武江地動之記』では、前半の話で、人々がすでに湧水現象が地震の前兆であるとの「民俗知」となっているが、後半では不思議がられたとされている。『安政見聞録』では井戸水の変化が地震の前兆であることの「民俗知」から、服部の知見として、湧水現象も同様であるとの記述となっている。湧水や井戸水の変化によって地震を予知したとすれば、これらは予兆としての性格を持つものである。この話は井戸や水脈の話題として恰好のものであったのか、他に『江戸大地震末代嘶しの種』『安政見聞録』『時雨廻袖』でも取り上げられている。『江戸大地震末代嘶しの種』『安政見聞録』では水脈の狂いによって湧水したと記し「武者 一九五一 四七五」、『安政見聞録』同様に合理的解釈を加えている。『時雨廻袖』でも、「昔より大地震のきざし有時は井の水濁り、又は溜などする事有」と記しており「畑 一九一七 七二」、明らかに予兆として意識されている。これらの記述にみえる湧水現象と地震との結びつきに関する解釈は、『武江地動之記』でも人々の「民俗知」とされたり、不思議とされたりしていること、他では著者の知見となっていることから、湧水現象が地震の予兆としての普遍的な「民俗知」として語られてはいなかったと推察することができる。実際に、『安政見聞録』の話は、「地震の前後地脈狂ふの條」の中で紹介されたものである。「かく地中動くにより。地脈かのごとく狂ふなり。因て井の水ひハ増。あるひハ減じて常にかはる。」「服部 一九七九 一七三」と記した後に、続けて上の話しが紹介されている。しかし、「これを見聞く人毎にたゞ不測の事なりといひて。地脈の狂ひしに心ハ著ず」の一文も見え、「不測」に「ふしぎ」とルビをふっており、「民俗知」としての解釈を人々は持つていなかったことが読み取れる。しかし『武江地動之記』や『時雨廻袖』では、解釈を抜きにして「P↓Q」において、「P」と「Q」の結合のみを記している。渡邊は、知識は「その蓄積は全体としてみれば、まとまりや一貫性を欠いており、部分的にしか明晰なものではない。しかし行為において満足な結果を生み、その解説（陳述）が満足な説明を与えるかぎり、知識は行為者の目的に奉仕す

る」と指摘するように「渡邊 二〇〇〇 一五」、「民俗知」においては、結合された認識だけではなく、「解説」が必要となることは当然である。人々を納得させるためである。『安政年間大地震津浪の事』も解説がつけられていた。『安政年間大地震津浪の事』では「畠中又は建物なき広地へ逃げる」とあり、その理由は倒壊する建物がないという説明がなされている。この説明は合理的ではある。

伊勢大湊、山中立之介秀之稿とされる『安政元年甲寅十一月四日大湊大地震之事』（以後『大湊大地震之事』）に「地震があらば井戸をのぞくべし。水なくなれば津浪のくるものなりと、むかしよりいひ傳ふることなり。此度は井水少しもへらず、直に水まじたり。余が家の井戸も壹尺計り水まして廿日もはらざりしなり。」とある〔武者 一九五一 二四六〕。『大湊大地震』は日付から東海地震時のことであることがわかるが、このときの津波はかなり激しいものであったことが続けて記述されている。しかし、井戸水は少しも減らないどころか、逆に増したにも関わらず津波が来た。「むかしよりいひ傳ふる」とことと逆の現象が生じているのである。必ずしも「民俗知」は正確なものではなかった。やはり東海地震についての記録である『嘉永七年甲寅地震海翻之記』（以下『地震海翻之記』）に、「古老の云傳に、井の水干るといえれど、此度の津波には井の水干ず。されど濁れたり。又此頃の濁水にて涸れたりし川瀬に、水湧出たり、又浪も前にいへる處まで寄せたるのみなれば、さのみ遠く逃るに及ばざりしといへども、是かるかりしゆゑなり。かかりしとて、後人心をゆるすべからず」〔武者 一九五一 九六〕とある。「古老の云傳」との記述から、ここではすでに井戸や津波に関する「民俗知」があつたが、現実には「古老の云傳」とは異なる現象がおきた。だからといって、無視してはならないと記述されていることに着目したい。この場合、「民俗知」に信憑性は問われてはいないことになる。このことは「語られてきた」ことが重要視されていたことを示すといえるのではないか。渡邊欣雄は「民俗知識の正当性」として、「すなわち「正当化」とは、制度的秩序の知識内容が新しい世代に受け継がれていくような場合に必然的に生じてくるものである。つまり客観化され、す

に共有されているコミュニティの伝統的知識の担い手が、伝統的知識の正しさを知識の受け手に対して説明し、知識の受け手の主観に客観的秩序のもとにある知識が形成される、正しきの証明過程をいうのである。」と述べる
 「渡邊 一九九〇 二四」。渡邊のいう「客観化」とは経験則の積み重ねによつて形成される真実との意味のようである。すると「客観的秩序」とは、経験則によつて得られた「正当性と思われる」説明といえるだろう。しかし「客観」は主体を離れて合理的に考察されることで得られるものである。その意味においては、渡邊の「客観」という語句にいささか違和感がある。経験により得られた正当性は、科学的（合理的）に説明できるものではなく、本人と主体をとりまく社会の「知」であると考ええる。つまり、「民俗知」の成立に解釈的説明は有効であるが、必ずしもそれは科学的正当性を持つものとは限らず、「語られてきた」ことが、「民俗知」としての信憑性を担保するのではないだろうか。すると解釈的説明は、「民俗知」そのものではなく、「民俗知」を補強するためのものと考えることができであろう。そのために「語られてきた」事実が重要なのである。

（三）「民俗知」の偏在性

『安政見聞録』の「卑賤の老父転変を知るの條」には、

然るに最初三條にて大震にあひしとき。博識人のまうししにハ。凡大地震のあるときハ。天色朦朧として空近く。星の光り常に倍す。また温暖なるもの也。と聞たるを今に忘れず。毎夜空をうちながめ。星常のごとくなれば。心を安んじて候ひしが。信州地震ハ二月にて。彼國別けて寒氣強きに。この頃すべて温暖なるさ也。常にハ變ると存ぜしに。前夜より星の光り。殊に大きくして昴參の中の小星。俗に糠星と唱ふるものも。鮮明に見ゆるのみ。鳶舞ひ鴉噪ぎ立。雉子聲を和すことあり。都てこれを地震の兆と。親しき人にもこれを告。竊

に準備なしける。果してその翌晩に。大地震のなりけれと準備せしまゝ怪我もなさず。されどまた此処にても。家財ことごとく失ひぬれバ。詮方なくて江都へ出ぬ。思ふに老若敷を盡して。死したる中に恙なきハ。全くその前兆を聞おきたる故也しと。夫より後ハいよく信じて空を候がいざる夜とてもあらず。然るにこの一兩日。また地震の兆ある故。其當否ハ存ぜねど人々にも告げたりしが。卑賤の者のいふ事と。悔り給ひし人々ハ多く過給ひけり。またそれを信ぜし人ハみな恙なく存するこそ。〔服部 一九七九 一三二―一三四〕

との一文がある。ここでは、「博識る人」と「卑賤の者」との対比があり、「博識る人」に「卑賤の者」が教えられるとの構図となっているだけではなく、「信じる」ことが予知につながるとされるところに注目したい。そこに明らかに「民俗知」の階層的偏在性を見ることができるのである。「民俗知」は「博識る人」だけの物であった。しかし、「卑賤の者」が、この結びつきを別の人々に教えても、「卑賤の者」の話しゆえ、信じない人もいた。そして信じなかった人は被害を受け、信じた人は恙なく過ごせた。このことから、「民俗知」は「博識る人」と認められた人にはあるが、そうではない「卑賤の者」にはあるはずがないという前提があることがわかる。「民俗知」を持つ者への対象観念が背景にあったことを示すのではないか。

さらにこの話からは、「民俗知」は「信じる」ことに重要性が置かれていることに着目したい。「信じ」た上に、実体験が重なることによる確信となったところで、「民俗知」が「民俗知」として強化されるといえるのである。

また『武江地動之記』に「加藤岩十郎話」として、

牛込川田か窪種店萬屋某か裏に榎の古樹有り。枝葉繁茂しけるか、七八月の頃より數萬の雀群り来りて囀り戯るゝ事日毎にかはらす。地震の前よりはいつとなく一羽といへ共来らすなりぬと。是は前兆とも定かたけれ

と此頃の一奇事なれはとてかたられし。〔斎藤 一九七〇 一九九〕

とある。「是は前兆とも定かたけれと此頃の一奇事なれはとてかたられし。」との一文から、斎藤は前兆であると考えているが、人々は「奇事」として語っていたことがわかり、斎藤とそれ以外の人々との間に知識の温度差があることがわかる。「民俗知」を持つ対象概念の存在認識を含めて、渡邊欣雄が「民俗的知識にはある種の「成層性」があつて、均質・平板な一様性を帯びていない」と指摘するように〔渡邊 一九九〇 一三〕、「民俗知」には階層性・偏在性が認められる。

(四) 事前予兆・事後予兆としての「民俗知」

先に地震に関する「民俗知」には予兆と行動に関するものがあることを指摘し、すでに「前兆」として認識されている例としての記述を紹介したが。ここでは、予兆の成立についてみる。「卑賤の老父転変を知るの條」には「鳶舞ひ鴉鳴噪ぎ立。雉子声を和す事あり。都てこれ地震の兆と。親しき人にもこれを告」〔服部 一九七九 一三三〕とあり、鳥の異常行動が予兆として認識されていた。すでに紹介しているように、動物の異常行動に基づく予兆としての「民俗知」が認められるということである。

雉子が鳴くと地震がくるとの俗信は、各地で確認されている。少し民俗誌を見ただけでも、埼玉県桶川市川田谷地区〔桶川市 一九八八 五一二〕、埼玉県日高町高萩地区〔日高町史編集委員会 一九八七 二〇四〕、埼玉県草加市全域〔草加市史編さん委員会 一九八七 七七一〕、秋田市大浜・寺内地区〔秋田市 二〇〇五 五八七〕、愛知県岡崎市〔新編岡崎市史編集委員会 一九八四 二九六〕などで確認できた。総務省消防庁HPの「災害に関わる「言い伝え」」でも、雉子についての「言い伝え」が多く紹介されている。トリブッチは、「キジは飛び方が下手

だし肉が美味でもあって、たえず天敵に追いまわされている鳥だ。そのためにキジにはすぐれた聴覚と振動感知能力が備わっているのだらう」と指摘している「トリブッチ 一九八五 五一」。トリブッチに従うならば、雉子についての伝承の多さはその生態にあることになる。

他の動物に関する予兆としての「民俗知」としては、神奈川県平塚市岡崎地区では「ねずみが騒ぐと地震がある」「平塚市史編さん課 一九八二 五七」、埼玉県日高町原宿・新宿地区では、「ネズミがいなくなると地震がおこる」「日高町史編集委員会 一九八七 二〇四」などがあげられる。予兆は「P↓Q」において、「P」は「Q」の必要十分条件との確信の上に成り立つべきものであり、そのために予知することで身の安全を確保することができ、事前予兆と呼べるものである。

一方、神奈川県大磯町本郷地区での関東大震災時の話として、『大磯町民俗調査報告書』に「大正十二年の関東大震災つてあつたですね、九月一日。その前日に、わたし子供だから、もう明日から学校だからつてわけで、海に遊びに行くのは得意だったんだけど。我々が体験した不思議な現象っていうのは、八月三十一日に、海岸に遊びに行ったら、海岸に、もうね、小さい小魚がずっと並んで、それもね、喜んでみんな（魚を拾った）。それが九月一日のお昼のおかずになったんだけど。ですから、何か海底には、異変があつたんだと思うね。これは、昔の古いことわざと違うけども、わたしたちの代で不思議だなあと。そういうことは知らないから、みんな子供たち喜んでね。波打ちぎわに、小魚がね、ずっと並んでたんですよ。」「大磯町 一九九五 二三七」との報告がある。大正四年生、男性の話である。「昔の古いことわざと違う」と語っていることから、当地では話しにあるような出来事が「民俗知」として認識されていなかったことがわかる。ただし、「古いことわざ」がどのようなものであつたかについては不明である。この話で興味深い点は、動物の異常行動に対し、後にそういえばとして回想される形になっていることである。事後回想である。

これらは直接的に「 $P \rightarrow Q$ 」の形にはならないため、予兆としての「民俗知」として捉えることには無理があるといえるかもしれないが、有事の際の回想が定型的に語られることは多く、その意味では事後予兆としての「民俗知」と位置づけることができよう。大磯の事例は、意識がなされていなかったため、まだ予兆としての確実な「民俗知」とはなっていないが、同様の経験の繰り返し事後予兆としての「民俗知」を形成し、さらに確信となったときに事前予兆としての「民俗知」へと認識されていくことが考えられよう。しかし、いずれも地震後に語られた形になっている。つまり地震がおきたことの説明として「 P 」が捉えられており、事前・事後予兆も、実際には「 P 」は地震がおきるための十分条件のな成り立ち方をしている。両者の違いは、事後に「 \downarrow 」を断定的に捉えるか否かとなっている。ただし、「卑賤の老父転変を知るの條」にあるように、明確に予知として捉え、用心したとの記述もあるが、そこには「信じる」という別の要素が入り込んでいる。このように考えるならば、事前・事後予兆は必要条件であり、十分条件を満たしていないが、そこに「信じる」という要素が加わることにより、必要十分条件としての価値を獲得することになるといえよう。

(五) 発行体現象・異常気象

地震・津波において、発行体現象や音・火柱、異常気象について語られることは多い。物理学者の中にも、地震前の発光現象に関心を持った人がある。寺田寅彦である。寺田は短いながらも談話（「大地震と光り物」「地震に伴う光の現象」〔寺田 一九九八a〕）や著書紹介（「地震と光り物 武者金吉著『地質に伴う発光現象の研究及び資料』」〔寺田 一九九八b〕）として、発光現象について言及している。しかし、物理学者ゆえに、その関心は科学的な意味においてである。武者の著書は、武者が地震学者であることから、地震学の立場からだろうが、残念ながら原典にあたることはできなかった。しかし本論での関心は、科学的証明ではなく、どのように語られているかに

ある。

『安政年間大地震津浪の事』には、「心得の事」の中に、「大地震にて沖の方光り物又は大筒を発するよふな音いたし候はゞ、忽彼大浪打寄来るに違ひなければ」とあつたが、このように予兆として「光り物」「大筒のような音」があつたとの伝承は多い。たとえば、『大槌町市史』には、明治二十九年、昭和八年の津波前に大きな音がしたとの報告を載せている[「大槌町史編纂委員会 一九八四 一四四八・一四六〇」]。武者は「水島七郎手記、和歌山縣誌所収」として『新古見聞覺』を紹介している。『新古見聞覺』は「當月四日朝五ツ半時大地震ゆり初」とあることから、東海地震時の記録である。そのとき被害状況が簡潔ではあるが記されている。『新古見聞覺』には「安政元年霜月大地震之次第」「田邊地震津波之次第」の条目があり、「田邊地震津波之次第」に、

同月廿五日朝四ツ時八ツ時三ヶ度海中大に鳴、其音千雷萬雷の壹度に落し如く、人々津波と心得、海邊は壹人もなくみな高き所に逃ふ。去れ共津波二而ハ非ず、是ハ往古より有事二而地震の氣海中へ發し候間鳴申也。然共未地震は止み不申。〔武者 一九五一 二二一〕

との記述がある。海中で多くの雷が一度に落ちたような音がしたため津波が来るとして逃げたことが記され、すでに音と津波が結びついて捉えられていたことがわかる。「大きな音↓津波」であり、「有事」の際に地震の「氣」が海中に発生するためと昔から語られていたとも記され、ここでは、単なる行動の「民俗知」としてだけではなく、解釈が付会された「民俗知」となっている。実際には津波はこなかったが、このことがかえって「語られてきた」ことが、「民俗知」として重要であつたことがわかる。すでに指摘しているように、解釈はあくまでも「民俗知」を補強するために付会されたものであることもいえる。

さらに翠岡主人が江戸地震の見聞を記録した『時風録』には、「今を去ること一五三年、元禄十六年十一月廿二日夜、江戸、小田原大地震、其頃天野彌五右衛門といへる老人の曰、星ひきく見へ、冬温かなる年は、地震あるものぞ」と記し「武者 一九五一 四八四」、一五三年前の地震時に伝えられた老人の言葉を引いている。この記述内容の真偽をもとめることはできないが、少なくとも安政江戸地震時において、過去の大地震が語り継がれていたことはわかる。そして、翠岡主人は「ここに思ひあたることあれ、頃年冬暖かにて、寒中雪ふること稀なり。また今年夏入初めより、巽にあたりて大なる星いづ。其光甚しく、人々怪み思へり。是ひきく見ゆる故なりしか。」とし、「語られてきた」ことを「現在」の状況に当てはめて捉えている「武者 一九五一 四八四」。ここに「民俗知」の再生産をみることができる。これは、『武江地動之記』の「貴賤の老父転変を知るの條」と同じく、天候異変が事前予兆として捉えられているものといえる。

ところで『武江地動之記』には、「地震の少し前に、洋の方に四斗樽といふものゝ大さ成光り物ありて左右へ分る。一つは房総の方へ赴き、一つは江戸の方へ赴くと見へしか、間もなく大地震あり。」と記されている「斎藤 一九七〇 一八五」。ここでは予兆としてではなく、単なる「事実」として記述されている。この文は書の冒頭で記述されており、読者の気を引こうとしたことが推察される。するとこのような話しが「情報」として、人々にもとめられていたことが推察される。つまり、このような話しが人々の間に「真実」として認識されていたことが推察されるということである。「真実」とは、「事実」とは異なり、信じるにたるものと認識されたものとして本論では考える。そのために必ずしも「事実」とは限らない。これと類似する話が『地震海翻之記』にもみられる。

此地南部郷

かく平穩なるゆるよしは、寶永四年十月四日津浪の時、猪野山より見しに、鹿島の山を五つ六つ重ねあげたるばかりの浪、大洋より寄り来るに、其浪の中に白く圓くして妙なる光りある物ありけるを、あや

しとまもり見けるに、かの大浪、二つに破れ、小き方は此浦へ寄せ、大なるは東の方へゆくに、彼の光り物、其浪の中にうちかこみてつれゆきしが、芳養沖と思ふあたりより、浪を離れて鹿島の宮の御山に飛びかへりぬ。是此神の御霊なること、疑ふことなく、この御守りによりて、此地はおだやかなりしよし。當時山内重賢が記せる書、鹿島神宮神殿に納めあり。全文、紀伊國名所図繪にありその先縦によりて、此度もおなじ神の守護によれるなり、その證據は申刻津浪よせこんとするときばかりに、未申の方の海上に火柱たつと見しに、たちまちに津浪よせきたるを、猪野山にて、前の四日に逃げ登りしまま、今日まで居たる人々の見しに、かの大浪澳の寄せ来り、鹿島の御山にあたるが、大砲の音して二つに破れ、彼の寶永の時の如く、大小にわかれ大なるは田邊澳へとゆき、小きは此浦によせつと語れり。夜に入り、右の御山より、神火大遠見鞠の如しの出で、海上に浮び守護し給ふこと、終夜なりき。

〔武者 一九五一 九六〕

宝永四年は、一七〇七年である。そのときの津波のときに、波の中に光り物があつたが、その光が「鹿島の宮の御山」に飛んで行ったことから、光り物が鹿島の御霊とされたことが、「山内重賢」が記した書にあるとする。それが嘉永の地震時に「民俗知」となっていたかどうかは不明であるとしても、宝永四年の話においては、津波の中に光り物が認められ、それが嘉永七年の東海地震時には夜に「神火」があつたとの話になっている。この「神火」は翌日も現れた。ここでは、「光り物」が鹿島神宮と結び付けられて「御霊」とされ、さらに「神火」として捉えられている。地震と鹿島神宮との結びつきについては本論のテーマではないので触れないが、ここで問題としてたいのは、宝永の時代に山内重賢が「御霊」と記していたか不明であるが、少なくとも、安政年間においては、「御霊」として認識され、さらに、発光体が「神火」として「神」との関係の中で認識されていることである。

「卑賤の老父転変を知るの條」では、「暖冬で、星が低く見える」ことを予兆とするかについては、「信じる」か

否かという問題があつた。科学的な根拠が見いだせないための必然であろうが、このことは、科学的に説明できない現象を「神」に結び付けて解釈することが行われることは必然的な方向性であろう。

いずれにしても、説明ができないものについては、『時風録』のように、事後に語る形での「民俗知」の再生産が行われ、『地震海翻之記』では「神」と結び付けて解釈を行う形となっている。それでも『地震海翻之記』は予兆的な話ではないが、「神」との関係性が「民俗知」として認識されていたことになる。

五、行動からみた「民俗知」

行動における「民俗知」は、「P↓地震」ではなく、「地震↓Q」の形をとる。予知ではなく、即時的行動に関する知識とし、本論では地震後に何をすべきか、何をしたのかという問題はここでは含まない。

(一) 竹藪に逃げる

多くの民俗誌に「地震のときには竹藪に逃げろ」との伝承が報告されている。『豊栄市史 民俗編』によると、新潟県新潟市（旧豊栄市）福島潟では、「地震がおきたとき、竹やぶに入るとよい」〔豊栄市史調査会民俗部会編 一九九三 三九四〕、平塚市金目地区〔平塚市博物館 一九八四 一三九〕、埼玉県〔埼玉県 一九八六 六八四〕、埼玉県毛呂山町〔毛呂山町歴史民俗資料館 一九九〇 二八〕、秋田市〔秋田市 二〇〇五 五八七〕においても同様のことが言われていたことが報告されている。総務省消防庁の「防災に関わる「言い伝え」でも各地で、「竹やぶに入れ」といわれていることが報告されている。

武者が採録した『續地震雜纂』は書簡を集めたものであるが、その中の「播州赤穂中村細石より伊丹中村孫四郎江来書。十一月四日夕認」に、「藪の中へ参り候處」「竹中に一夜を明し」「藪の中へ近辺之者共寄集り」との記述

が見られる「武者 一九五一 一二六―一二七」。さらに『浦戸港沿岸震浪記（氣象集誌第七年第四号所載）』には、「安政元年甲寅」の地震時の記録として、「若老男女東西ニ彷徨シ、竹藪ニ潜伏スルモノアレハ、山中ニ攀チ登ルモノアリ。」とある「武者 一九五一 四〇八」。どちらも東海地震時のことである。浦戸港では竹藪だけではなく、山に逃げた人もある。「地震↓津波」を想定してのことと思われる。浦戸港には実際に直後に津波がきている。しかし、竹藪に逃げ込んだ人がいることは、すでに地震と竹藪との関連を持つ「民俗知」があつたことが推察されるだけではなく、「地震↓津波」との「民俗知」が普遍化されていなかったことを示している。『浦戸港沿岸震浪記』の最後に、「右前陳スル處ノモノハ當桂濱ノ土人ニシテ、今年七十五歳ニ達セシ稀老銀兵衛ナルモノノ直話ヲ筆記シタルモノ也」「武者 一九五一 四〇九」とあり、直接の実体験の聞き書きによるものであることがわかる。ただし、本文前に、武者の注として、「本文ハ當時内務屬土木局第五區巡視井上千代氏會テ高知縣屬奉職中浦戸港出張ノ際手記セルモノナリトテ同縣土木課長宮永莊正氏ヨリ會員和田雄治氏ヘ申越シタルモノナリ。」と記され「武者 一九五一 四〇八」、直接の体験談を筆記したものが、二人の手を渡ってきたものであることがわかるが、本文の最後の一文から、直接記録を採録したものであるといえよう。記録は「距今三十四年安政元甲寅地震ノ際、浦戸港沿岸ノ實況ヲ土地ノ古老ニ就キ探究スルニ」とあることから「武者 一九五一 四〇八」、記録がなされたのは、明治半ばということになる。なお浦戸港は現在の高知港である。

『時雨廻袖』には「上野三十六坊の内、去坊にて召遣ひける侍一人、其他一人、出生越後にて、江戸にといふ大地震は一向に驚かず、へ中略、昔から人のいふ竹藪に逃るがよしとの事なれど先年の大地震にては竹藪ども土中へ落入候事も是あり候由を、國元にて承り候得ば、大地震にては迎も竹藪も當てには成不申候杯、日頃話し居けるとか」「畑 一九一七 一九」とあり、越後ではすでに竹藪に逃げ込むことが地震の対処法としての「民俗知」として知られていたことがわかる。また高知の稲毛實著であり、安政の地震を受けて、過去の文献などを集めた『三災

録』に、「柏井難行録（寶永の變に記也）」に老祖母謂て曰、是ナヤトいふもの也。かかる折は藪中に入事也とて家族共北の藪中に入ぬ云々と有」とある「稻毛 二〇〇五 六〇」。これは柏井難行が老祖母から聞いた話であり、少なくとも宝永年間には高知では「民俗知」として「語られて」いたことがわかる。ただし安政当時の記録では、「地震のときに竹藪に逃げろ」と直接的に記述されたものは、管見のかぎり、『時雨廻袖』しかなく、他は『浦戸港沿岸震災記』のように、竹藪に逃げた人がいたという行動の記録である。しかし行動の記録を見るかぎり、安政年間において、地震の時には竹藪に逃げると安全であることがある程度は「民俗知」として知られていたと見てよいだろう。

総務省消防庁の「防災に関わる「言い伝え」では、「竹の根が張っているので地面が裂けない」「竹やぶは倒れるものがなく、根が強く張っているので安全」「竹藪は東西が密集にて土砂くずれが少なく、近くに倒れるものがなく安全」との理由がつけられている。しかし竹藪も必ずしも安全ではなかった。越後では、「竹藪に逃げる」との「民俗知」があつたが、実際には竹藪も崩れたという経験から、越後出身者は地震がきても竹藪には逃げないとい頃から言っていたとある。また『徳島縣板野郡誌』は東海地震被害について書かれたものであるが、これに、「其夜戌刻に至り大震りに而、藪の中竹に取付居候へ中略」手放るゝ様に相覚え申し候。此事跡にて不思議に被存候は、竹が動は人の居所も動く道理に存候得者、是計不思議被存候。」「武者 一九五一 四五六」とあり、竹藪に逃げるのがなぜ安全なのかという理由については「不思議」とされ、理由についてはわかっていないことがわかる。つまり「竹藪に逃げる」といふ行動に関する「民俗知」はあつたとしても、それがどうしてなのかという説明にあたる「民俗知」はなかった。しかし経験上崩れず安全だと認識していたことがわかる。一方、越後でかつて崩れた話を聞いたことがあつたために逃げないとする例も認められる。説明よりも、現実的经验が重視されていることがわかる。このことも先に述べたように、「語られた」経験が重要視されているということができよう。竹藪には逃げないと言う越後の人も自らの経験ではなく、「語られた」経験に基づく認識なのである。

(二) 唱えごと

地震時の唱えごと、各地の民俗誌にみることができる。「まんざいろく」(大磯町『大磯町史 8 別編 民俗』「大磯町 二〇〇三 七〇〇」、新潟県新潟市豊栄「豊栄市史調査会民俗部会編 一九九 三九四」)「まんざいろく」(平塚市大野「大野誌編集委員会 一九五八 一〇四二」)「まんざいろく」(桶川市桶川・加納地区「桶川市 一九八八 五一七」)「まんざいろく」(桶川市加納地区「桶川市 一九八八 五一六」)「まんざいろく」(平塚市大野「平塚市博物館 一九八七 二六九」)「まんざいろく」(秋田市牛島地区「秋田市 二〇〇五 五八七」)「まんざいろく」(和光市「和光市 一九八三 七〇八」)、「マンデロク」(大磯町大磯「大磯町 一九九七 二三八」)などである。どれも同系統の呪文と考えられるが、ではその元の形はどのようなものであったか。『新編埼玉県史』に、「囲炉裏に線香を三本立てて「マンザイラク マンザイラク」と唱える地域もある」(埼玉県 一九八六 六八四)との報告がある。この「マンザイラク」が元の形ではないか。「萬歳楽」と考えられるためである。「萬歳楽」は謡曲「高砂」の最後の部分の「千秋楽」に出てくる大変めでたい言葉である。「千秋楽」には、

さす腕には、悪魔を払ひ、納むる手には、寿福を招き、千秋楽は民を撫で、万歳楽には命を延ぶ。相生の松風、颯々の声ぞ楽しむ。颯々の声ぞ楽しむ。」(『日本古典文学全集33 謡曲集』六五頁)

とある。「万歳楽には命を延ぶ」との文言が、命乞いの呪文として使われるようになったのではないか。これは言霊信仰を背景にするものと考えられるが、危急時の呪文は咄嗟に口に出る言葉であろう。そのためには、「萬歳楽」との語句とその意味が一般に知られている必要がある。岡山県新見市千屋・菅生では、嫁の荷物を受け渡しが終わったときの歌に、「千秋萬歳楽 おうことかなうた 鶴がご門に 巢をかけた」という歌詞がみられる(「長谷川

一九八二 一三」。この事例だけでは、「萬歳楽」という語句が一般化しているとは言いがたいが、婚礼で謡われており、少なくとも民俗事象の中に「萬歳楽」がめでたい語句として受容されていたことが認められる。

『なるの日並』は笠亭仙果が直接見聞したものを、日を追って書きつけたものであり、安政江戸地震中、後の人々の様子がよくわかるものとなっている。『なるの日並』によれば、十一月二日に「市中にて心まかせにはゞかりなく彫刻しうりたる地震火事方角付の類、ならびに戯作の一まい画の類の板、とりあげおくべきやう、行事（地本屋の）にかゝりの名主よりいひつけらる」とあり〔笠亭 一九八四 四〇九〕、刷り物が幕府により禁止されたことがわかる。この禁止に対し、須藤由蔵は「江戸大地震」で、「絶板の後も又余れる物さまゞ在、一ツ二ツを、因ニよりて爰に出し、後の世に伝へて、雨中のなぐさめニ添る。」としていくつかの摺り物の内容を紹介している〔須藤 一九九五 五一七〕。その中に「厄払」と題するものがあり、それには「春ならねども皆人の、万歳楽とうたひそめ、かぞへた柱も折口の、おめでたくなる人の山、是も世直し本意から、立帰りたる神くの、踏かためたる葦原皇国」との一文がある〔須藤 一九九五 五一八〕。この一文から、春に「万歳楽」（「萬歳楽」）が唄われていたことがわかり、当時、「万歳楽」の語句が、めでたい意味を持つものとして、知られていたことが推察される。しかし地震後の刷り物には、続いて世直しの言葉があり、地震が世直しのきっかけになるとの期待が込められたと考えられる。そこには「新しい世の中の到来」春との観念が認められ、安政地震においての「萬歳楽」は、命乞いの呪文としてではなく、地震後の復興において、新しい世の中への期待感を表しているのである。つまり安政地震時には「萬歳楽」は地震の命乞いの呪文として認識されておらず、呪文としての「民俗知」とはなっていないかったということになる。

実際に、安政地震の記録の中で、「マンザイラク」と唱えた人の話しはでてこない。記録上のほとんどは念仏や題目を唱えていたというものである。『大坂地震記』は、嘉永七年六月十三日の午の刻、未の刻の地震から、日記

的に記されたものであり、それによると、六月十五日に大きな揺れがあり、「女童は泣きまどひ、たゞ神佛の御名を唱ふるより外なし。」と記述されている〔武者 一九五一 三七〇三八〕。嘉永七年六月十五日には、伊賀・伊勢を中心とする地震があり、十二日から前震があったという〔宇佐美 一九七八 二二五〕。『田邊町役場記録』の安政元年十一月五日の項では、「何れも念佛題目等を相唱は、夜を明し申候。」〔武者 一九五一 九一〕、『地震洪浪の記（和歌山縣古座町役場所蔵）』の嘉永七年十一月五日の項には、「心經を唱へ、又は念佛金比羅氏神諸神を祈りけり」〔武者 一九五一 三八八〕、同記の別の箇所には、「心經やら觀音心經やら念佛と金比羅山と氏神を唱る仲間も多く、つらひ時の神頼みといふは金言也。」とある〔武者 一九五一 三九四〕。これらから、安政地震の最中には念佛・題目・氏神・金比羅などが唱えられたということになる。『なるの日並』にも、「父子ともにこよひかぎりの命ならむとおもひなげくに、さりとめわれらはあつたのみやしをうぶ神とし、つねにうやまひねぎまつりて、万にみたまのふゆかうぶる、あかばねのみやしろのおほんたすけもなからずやおもふにたのもしく、声をかぎりに一命すくはせ給へと、繰返し〳〵祈り参らするほどに、今もすこしはゆるれど、立てまらばず家も事なきなり。」と記述され〔笠亭 一九七四 三八五〕、「マンザイラク」とは唱えられていない。ただし『三災録』には、「此言江戸にては萬歳樂〳〵と云。上方にては世直り〳〵と云」と記されている〔稲毛 二〇〇五 六一〕。高知への伝聞を書き記したものであるが、直接記録において、「萬歳樂」と唱えたとの記録はない。安政の地震において「マンザイラク」との呪文があったとはいえないのではないか。それでも地震直後から、江戸では「マンザイラク」との言葉が流行していることは読み取ることができる。それは刷り物からも明らかである。稲毛も「宝永十三年京都大地震」の時、賀茂季鷹が詠んだ狂歌「大変を大平に書世直して国もゆつたり家もゆつたり」を紹介し、「後を祝したる諺ならん」と述べている〔稲毛 二〇〇五 六一〕。

ここでの問題としたいのは安政地震時に、念仏・題目が延命と関連して認識されていたということである。念

仏・題目は往生のためのものであるためである。地震時に唱えることは、延命のための呪文として考えられていたことになる。しかしそれは仏教の本来の教えとは乖離したものとなっているということができないのではないか。では、なぜ現世利益的呪文として念仏や題目が唱えられたか。

江戸時代の檀家制度は、家と寺院とを結びつけ、葬送儀礼を寺院が執り行う形を定着させた。天台宗寺院の埼玉県児玉郡神川町渡瀬の龍宝寺の檀家が葬儀の後、親族と葬儀の互助を行う隣保班の人によって「お念仏」を行った「林 一九九三 六八」。さらに、地縁的な行事として念仏講や題目講が行われている地域も認められる「綾瀬市二〇〇一」。題目は日蓮宗に限られるが、念仏は浄土系宗派とは限らず、広く唱えられている。家と寺院との結びつきが、必ずしも檀家の内面的信仰心を背景としなかったことや、現世利益的であり、あの世への観念は薄いことはすでに指摘している「林 二〇一一 二四～二五」。このような行事は、宗教的というよりは民俗に沈着した行事として捉えられるものである。「お念仏」が葬式後に行われることは、本来の意味の中で行われる行事ということができる。一方の念仏講も「老人」世代において行われる地域は多く、念仏が「死」との関連で観念されてきたことは否めない。しかし極楽往生のためのものが、現世利益的性格が強い観念と来世観が薄い社会の中で、「死」の忌避との意味へと変わっていったのではないか。そのために「死」に直面したときに、咄嗟にこれらの文句が口をついて出てきたとは考えられないだろうか。宗派は関係なく、普段からの内面的信仰心はなかったとしても、命の危険に直面したときには、仏に訴えることで命を守るという無意識が働いたということである。

また神に対する信仰もかなり大きなものとなっている。『續地震雜纂』に収められている「橋村氏家来、大坂より同家江書状、十一月七日認
同十一日夜着」によれば、十一月四日の地震にあつたので、持船で安治川にて帰ろうとしたが、逆風で滞船しているところに、また地震があり津波に襲われた。そのときに「かしこくも神を祈り奉りなど致し候内、少々鎮まり候處、船方之差圖にて、取物も不取敢船傳ひに而丘江上り候處、又大地震、前々兩度よりも強く、いづ

れも心中に神を念ずるより外は無御座候處、無程鎮り、川筋も漸穩に相成候（後略）」とある〔武者 一九五一 一一六〕。さらに「京都地震（但し、此所付は飛脚本屋勘兵衛方へ、京都より内々書状也）」には、「夕四日朝五ツ半頃、地震にて、暫時に相済候心得に羅在候處、中々左様に無之、誠にく長々とゆり、中程に而は何と成行と存、只々神佛祈念より他事無之」とあり〔武者 一九五一 一一五〕、神仏への祈念だけしかないとまで言っているのである。

これらのことから考えるならば、民俗誌に報告されている「マンザイラク」およびその派生形は、安政地震後に一般化していったものである。『三災録』にあるように、江戸では安政地震後に世直しを象徴する語句として使われた、「萬歳樂」が地震と直接的に結び付けられて特化し、呪文として受容されていたと推察することができるのではないか。

六、地震における「民俗知」——まとめにかえて——

東北地方太平洋沖地震において、岩手県では、「てんでんこ逃げろ」との言い伝えを守り、命が救われたというニュースがあつた。津波を多く経験している三陸地方ならではの「民俗知」と言えよう。筆者が子どもの頃には、「地震があつたら、まず火を消せ」というものがあつた。安政江戸地震でも火災による被害が大きかったが、関東大震災でも火災が発生したことも、このような「民俗知」が生まれた要因であろう。しかし現在では、すぐに火を消す行動を慎むように言われている。かえって危険だとのことである。これは耐火構造・免震構造の家やビルが多くなった現状や研究の結果によるまず身の安全を確保する方が大事との成果を反映しているものと考えられるが、このことは、予測経験が新しい「民俗知」を生み出したともいうことができる。予測経験とは、実体験に基づく経験ではなく、シミュレーションなどによる経験を指す。いずれにしても、「民俗知」が経験則上に成り立つものであることに変わりはないといえる。

では、その特徴にはどのようなものがあるか。大きく二つに分けられた。予知と行動に関するものである。これは命に関わる問題であるとすれば当然のことである。特に行動に関するものは命に直結する。そのために、生き延びたとされる経験則が重要視されるのは必然である。それが「語られてきた」経験であり、信憑性に繋がるものであろう。

予知に関する「民俗知」は、「P↓地震」ということで、「地震↓逃げる」に繋がるものとして重要なものである。現在でも、地震予知に関する研究が行われているのはそのためであるが、科学技術についての知識がない人々にとつて、経験の積み重ねが拠り所になる。しかし、完全なものとは言えなかった。そのために、事前予兆であつても事後的にならざるを得なかった。必要条件的な捉え方しできない。現在でも地震予知は難しいとされているのである。必要十分条件とするには、「信じる」行為を必要とした。科学的知識が小さい人々では当然である。そのためにこれらは「迷信」として片づけられるのである。

さらに、日本は地震国とはいいながら、それは日本全体を見渡した場合であり、日本のどこでも地震がおこるということである。しかし局所的に見た場合、大きな地震のスペンはそれほど短くはない。短くても人の一生ほどの長さであろう。「語られてきた」経験が「民俗知」にとつて大事であるとするならば、語り継がなければ意味を持たない。三陸海岸のように頻繁に津波に襲われる地域では「てんでんこ逃げる」が生きた。しかし、それ以外の地域では、過去の記録から「民俗知」を掬い上げるといふ作業によるしかないだろう。都市化の進行と人口流動は、「地域」への無関心を生む。地震に関する「民俗知」を「語り継ぐ」環境が消失してしまっている。さらに、地震に関する「民俗知」は、科学と人知の狭間の中で、科学に対する信頼性、「語り」への矮小的認識の中で防災・減災の機能を失ってしまっているということができよう。

七、おわりに

「民俗知」の形成の問題、そして「民俗知」による地震・津波に対する意識を見てきた。安政年間の記録を中心に論考しているため、科学が発達した今日、どれだけ防災や減災に役に立つのかと問われれば答えに窮する。しかし「てんでんこ逃げろ」だけではなく、井戸水の変化による津波を予知し、難を免れたことがニュースで報じられた。

二〇一一年三月の東北地方太平洋沖地震からすでに一年以上たち、復興へと向かっている。しかし東南海地震や首都圏直下地震が懸念されている中、もう一度、地震に関する「民俗知」を検証する必要があるのではないかと。

引用文献

- アウエハント 一九七九 小松和彦・中沢新一・飯島吉晴・古家信平訳 『鯨絵―民俗的想像力の世界』せりか書房。
- 秋田市 二〇〇五 『秋田市史 第十六巻 民俗編』秋田市。
- 綾瀬市 二〇〇一 『綾瀬市史 8（下） 別編 民俗』綾瀬市。
- 石垣 悟 二〇〇六 「民俗資料の救済―新潟中越地震における対応から―」『日本民俗学』二四六。
- 稲毛 實 二〇〇五 「三災録」『土佐国資料集成 土佐國群書類従 第七巻』編集・発行高知県立図書館。
- 宇佐美龍夫 一九七八 『大地震』そしえて。
- 大磯町 一九九五 『大磯町史民俗調査報告書三 国府の民俗（三）―国府本郷・国府新宿・石神台地区―』大磯町。
- 一九九七 『大磯町史民俗調査報告書四 大磯の民俗（二）―東小磯・西小磯地区―』大磯町。
- 二〇〇三 『大磯町史 8 別編 民俗』大磯町。
- 大磯町史編纂委員会 一九八四 『大磯町史 下巻』大磯町役場。
- 大野誌編集委員会 一九五八 『大野誌』平塚市教育委員会。
- 小川直之 一九九二 「神奈川県内の日記史料の所在」『神奈川県民俗調査報告書十八 農耕習俗と農具―昼間家日記を中心に―』神奈川県立博物館。
- 一九九三 「伝承・フィールド・地域」井之口章

桶川市 次編『日本民俗学フィールドからの照射』雄山閣。一九八八『桶川市史 第六卷 民俗編』桶川市役所。

加藤幸治 二〇一一「被災文化財から学ぶこと」京都民俗学会第三〇回年次大会発表。

北原糸子 一九八三『安政大地震と民衆』三一書房。

小池淳一 二〇〇六『民俗信仰の領域』『日本民俗学』二四七。

二〇〇八「民俗知とは何か―宗教者概念の再検討―」澤博勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会3 民衆の〈知〉と宗教』吉川弘文館。

小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎校注・訳 一九七三『日本古典文学全集33―謡曲集―』小学館。

埼玉県 一九八六『新編埼玉県史 民俗2』埼玉県。

斎藤月岑 一九七〇『安政 武江地動之記』森嘉兵衛・谷川健一編『日本庶民生活史料集成 7』三一書房。

新編岡崎市史編集委員会 一九八四『新編岡崎市史 第九卷 史料 民俗』新編岡崎市史編さん委員会。

須藤由蔵 一九八九『諸国地震之記』鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第六卷』三一書房。

一九九五「江戸大地震」鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第十五卷』三一書房。

関谷 溥 一九七〇「解題」森嘉兵衛・谷川健一編『日本庶民生活史料集成 7』三一書房。

草加市史編さん委員会 一九八七『草加市史 民俗編』草加市。

総務省消防庁「防災に関わる「言い伝え」」
http://www.fdma.go.jp/html/life/saigai_den-syo/02pdf

蘇理剛志 二〇一一「災害と有形民具資料―台風一二号災害による和歌山県下を中心とする現状と課題」京都民俗学会第三〇回年次大会発表。

常光 徹 二〇〇〇『親指と霊柩車―まじないの民俗―』歴史民俗博物館振興会。

寺田寅彦 一九九八a「大地震と光り物」「地震に伴う光の現象」寺田寅彦全集 第十五巻 岩波書店。

一九九八b「地震と光りもの 武者金吉著『地質に伴う発光現象の研究及び資料』紹介」寺田寅彦全集 第十六巻 岩波書店。

豊栄市史調査会民俗部会編 一九九九『豊栄市史 民俗編』豊栄市。

長谷川明 一九八二『奥備中の民謡』岡山民俗学会。

畑中章宏 二〇一一『柳田国男と今和次郎 災害と向き合う民俗学』平凡社。

畑 銀鷄 一九一七『時雨廻袖』江戸叢書 巻の十（江戸叢書刊行会）。

服部保徳 一九七九『安政見聞録』宇佐美龍夫解説『江戸科学古典叢書 19 太極地震記 安政見聞録 地震預防説 防火策図解』恒和出版。

林 英一 一九九三『葬送儀礼の変容とその様式―埼玉県

児玉郡神川町渡瀬の事例を中心として―』『長野県民俗の会会報』16。

二〇一一「無宗教家族葬の実態と歴史的位置付け」『京都民俗』二十八。

日高町史編集委員会 一九八七『日高町史調査報告書第五集 民俗Ⅲ』日高町教育委員会。

平塚市史編さん課 一九八二『平塚市史民俗調査報告書2―豊田・岡崎―』平塚市史編さん課。

平塚市博物館 一九八四『平塚市史民俗調査報告書4―金目・金田―』平塚市博物館。

一九八七『平塚市史民俗調査報告書6―大野―』平塚市博物館。

ヘルムート・トリブッチ 一九八五『動物は地震を予知する』朝日新聞社。

武者金吉 一九五一『日本地震史料』毎日新聞社。
毛呂山町歴史民俗資料館編 一九九〇『毛呂山民俗誌 第

1巻』毛呂山町。
笠亭仙果 一九七四『なるの日並』日本随筆大成編輯部編

和光市 一九八三『和光市史 民俗編』和光市。
渡邊欣雄 一九九〇『民俗知識論の課題―沖縄の知識人類

学―』凱風社。